

里山辺かるた読み札解説

④ アルプスを一望に見る 里山辺 (アルプスの眺望)

⑤ いにしへの歌人が讃えた 東間の湯 (美ヶ原温泉)
「東間」は後に「筑摩」の字が充てられた。684年天武天皇は東間の湯に行宮造営のための調査を命じたと記録にあるが、その地が湯の原温泉か浅間温泉かは議論の分かれるところである。湯の原温泉には平安歌人の源重之と殷富門院大輔の歌碑がある。

⑥ うめの峰より流れる 薄川 (薄川)

⑦ えん天で ブドウの笠かけ 山辺の地 (ブドウの里)
「山辺のブドウは江戸時代の元禄・宝永年間(1700年代)より作られ始めた。」と伝わる。里山辺地区で栽培がさかんになったのは昭和に入ってからである。

⑧ おっくら 今に伝わる こと八日 (こと八日)
2月8日に五穀豊稔・悪霊退散を願って行われる民俗行事で、山辺の地に多く残る。里山辺地区では当日男女に分かれて豊作を祈願して行われる「追倉の綱引き」行事が有名。

⑨ か 数正の 眠る 兎川寺 花吹雪 (数正のお墓)
石川数正の墓は兎川寺の境内にひっそりと建つ。供養塔であるのでお骨は存在しないと言われている。兎川寺と石川氏の結びつきの強さを示すものである。境内にはしだれ桜の古木もあり、春の花吹雪が墓に舞う。因みに数正の供養塔は国内に数箇所存在が知られている。

⑩ き ギヤマンと 並び誇れる 障子学校 (障子学校=山辺学校)
上金井の大工佐々木喜重が棟梁となって明治19年に建立した。開智学校のように金井にステンドグラスやガラス(ギヤマン)を入れる財力が無かったため、障子が建てられたことからこう呼ばれた。因みに開智学校は明治9年の開校である。

⑪ く 暮らしの美 集めて展示 民芸館 (民芸館)
故丸山太郎氏が蒐集した民芸品の総てと住居が、松本市に寄贈され下金井にオープンした施設。その内容の充実ぶりから「日本三大民芸館」と称される。柳宗悦の民芸運動に共感しての蒐集品である。

⑫ け 競馬跡 偲ぶすがの 馬頭石 (西小松競馬場跡の馬頭石)
かつてこの地で草競馬が催されていたことを知る人は少ない。その跡地にひっそりと立つ馬頭石のみが僅かに面影を伝える。

⑬ こ 古代への 思いを馳せる 針塚古墳 (針塚古墳)
兎川寺町会と薄町町会の境界付近の田中に立つ、国内でも珍しい積石塚古墳。弘法山古墳より100~150年程歴史は下るとされる。その形式から「渡来系氏族の卦妻氏の先祖(後に須々岐氏)の墓」とする研究者もいる。

⑭ さ 桜咲く 湯坂登れば 御母家の湯 (御母家の湯)

⑮ し 出征の 兵士を偲ぶ 万歳塚 (万歳塚)
つい50~60年前までは山辺と惣社の境は「惣社ヶ原」と呼ばれ、寂しい場所であった。この一角に石積みの中屋敷の塚があり、その上で里山辺からの出征兵士を万歳で送り出した。今では場所の特定さえも困難である。

⑯ す 杉木立 古刹禅寺 廣澤寺 (廣澤寺)
嘉吉元年(1441)小笠原康康によって建立された龍雲寺が元。後に小笠原長棟によって現在の寺号に改められた。代々小笠原氏の菩提寺とされたため、明治に山辺で唯一廃寺を免れた寺である。

⑰ せ 戦国の 歴史を語る 林城 (林城)
井川の城が同族飯田小笠原氏の襲撃や度重なる洪水により悩まされた清宗が長禄4年(1460)頃完成させたと言われる。以後天文19年(1550)長時が武田氏に敗れて城を放棄するまでの約90年間ほとんど存続したと考えられる。

⑱ そ そここで 村中見守る 道祖神 (道祖神)
湯の原の辻堂のものが元禄時代(推定)で、山辺で一番古いと言われている。

⑲ た 助け合い 地域の輪広がる 福祉ひろば (福祉ひろば)

⑳ ち 千鹿頭の 峰を境に 藩を割る (千鹿頭神社)
小笠原忠政(8万石)の後に戸田康長が7万石で入封する。その差額1万石分が諏訪氏(東5千石)高遠氏(西5千石)に割譲される。これが東5千石の成立である。範囲は神田・中山・寿・内田で千鹿頭山の峰が境界とされ、神社も松本と諏訪に2分されるに至った。

㉑ つ 連れ立って 桜並木の 川面愛で (薄川堤の桜並木)

㉒ て 天狗山 清き水の 流れ出る (天狗山)

㉓ と 徳川の 歴史を拓いた 兎田の主 (兎田伝説)
小笠原清宗の次男、林藤助が林の地に館を構えていた頃、旧知の徳川の祖(有親・親氏)父子が浪々の途、藤助を訪ねた。年の瀬で何もなす物と無い藤助は野兎を狩って持てきた。その後、徳川氏ほとんど拍子で隆盛を極めた。林氏も「徳川譜代」として幕府を支えた。

㉔ な 南北に 走る街道 五千石 (五千石街道)
東五千石の中山から南小松一北小松一西荒町一下金井を通して湯の原へと通じている街道を通称「五千石街道」と称した。

㉕ に 賑やかに 卯酉卯酉と 御柱 (御柱祭)
諏訪系である須々岐水神社・千鹿頭神社は共に足掛け7年目の卯年と酉年に御柱祭を行う。諏訪大社の1年遅れの催行である。

㉖ め ぬれ色に 染まる青葉や 四脚門 (矢崎家の四脚門)
上金井の矢崎家にはみごとな四脚門がある。明治の廃寺の折、さる古刹より移築したものというが詳細は不明。

㉗ ね 願いごと 叶える山辺 福だるま (福ダルマ)

㉘ の のどかなる 宵に唄うよ 新井権現風祭り (新井権現)

㉙ は 白山神社の秋祭り 賑やかに曳く 子ども船 (白山神社)
正式の社名を白山大権現と言ひ創建年代は不詳。本殿と拝殿とからなる。かつては拝殿が公民館の代用施設となっていた。毎年九月の第1日曜日が例祭りで小学生が中心となって子ども船を曳行し祭りを盛り上げる。古代から霊験あらたかなる産土神として評判が高い。

㉚ ひ ひらひらと 蝶の楽園 藤井谷 (藤井谷)
水源は洪池で急峻な溪谷を下り、清水で湯川と合流し女鳥羽川に注ぐ。多年流域住民に被害をもたらした暴れ川もダム完成で安心・安全がもたらされた。溪谷は昆虫、特に蝶の生息地として有名で個体数・種類も豊富である。国蝶のオオムラサキやカタクリを食草とするヒメギフチョウの生息地としても知られる。

㉛ ふ 船祭り 須々岐の宮に いざ行かん (須々岐水神社)

㉜ へ 経る年を 耐えてみごとな 松並木 (薄川堤の松並木)

㉝ ほ ぼんぼん青山様 山辺つ子に 受け継がれ (青山様・ぼんぼん)

㉞ ま 松本の 十二薬師に名前連ねし 三御堂 (下金井・湯の原・林の各薬師堂)
江戸中期以降、観音霊場巡りが盛んになるが、同時に「薬師信仰」も盛んになり「松本十二薬師」が誕生し、里山辺では上記三堂が名を連ねている。下金井・湯の原の各薬師堂は今でも地域の信仰の対象だが、林薬師堂は跡を止めずその存在すら忘れられている。

㉟ み 脈々と 里田潤す 大堰 (大堰)
薄川の付付地籍から取水し、薄川以北の地を潤す大動脈でその歴史は古く、渡来系氏族の卦妻氏(後の須々岐氏)により開削されたものとする説が有力である。「おおせんげ」は当地の方言的言い回しである。

㊱ む 無病息災 災に願い 三九郎 (三九郎)

㊲ め 眼を見張る 眺め広がる 金華橋 (金華橋)

㊳ も 木食は 厳しき修行 民救う (木食山居上人)
江戸中期衆生救済のため火食を断ち、木食行・単衣行の苦行を自らに課しながら千体仏造形を志した高僧で、新井村出身の人。晩年大町『弾誓寺』にて生身入定して果てたという。里山辺地区内にも30体弱の木食仏が確認されている。

㊴ や 屋根に葺く 茅に紅葉の 八坂の社 (八坂神社)

㊵ ゆ 悠久の 星を間近に プラネタリウム (教育文化センターのプラネタリウム)

㊶ よ 夜泣き地蔵 煮かけうどんの 衣着て (南小松の夜泣き地蔵)
南小松町会の一隅にひっそりと建つ40cm程の小ぶりのお地蔵様。子どもの健やかな成長を見守る地蔵で、夜泣きが治まらないとき煮かけうどんの初とうじを肩にかけてお祈りすると治まるといふ。別名「煮かけ地蔵」。

㊷ ら 爛漫の 春先取りの ろとう桜 (山辺中学校の魯桃桜)
早春、桜に先駆けて桜と似かよった花を付ける桃の仲間樹木である。日露戦争の折、出征した佐々木出身の将校が持ち帰ったものと言われ、県内中心に300本程度が確認されているのみの珍しい種である。山辺中グラウンドに10本弱が植えられている。

㊸ り 凛と咲き 古え語る 白牡丹 (兎川寺の小笠原白牡丹)
小笠原長時が武田氏に敗れ敗走したとき、敵兵に踏みつけられるのを忍びず、兎川寺に託したと伝わる。牡丹はその後、檀家の久根下家で保護され今に伝わったという。

㊹ る 累代の 殿が愛した 御殿の湯 (湯の原御殿の湯)
江戸初期石川氏が近郊の保養地として山辺茶屋を設け、その後水野氏によって増改築された。その折、湯守にも自分の湯場を建てさせ湯治客を受け入れることを許可したのが、湯の原の温泉街の始まりという。御殿の湯は明治4年に官有化されるまで続いた。

㊺ れ 歴史を拓く 役割担った 山辺道 (山辺街道)

㊻ ろ 六町会 湯川で結ぶ 絆あり (湯川)
主に大堰・追倉沢・藤井沢の水を集めて、本郷地区を通り清水にて女鳥羽川に注ぐ薄川北部地域の重要河川である。

㊼ わ 和を結び 豊かな里を 築きゆく (里山辺町会連合会)

㊽ を 乙女の恋 宿世を結ぶ 逢初川 (宿世結の神)
大同年中(800年代初期)林の里長「六郎」の娘「有後姫(うろこひめ)」が藤原緒維と結ばれたとの伝説に由来する良縁結びの神である。千鹿頭山西側の小高い山の鞍部に小さな祠が建つ。廣澤寺山を水源とする逢初川が脇を流れる。川辺に「信濃ノ逢初川ノ辺ニハ志ユクセムスノ神イマシマシ」の古歌碑が立つ。

㊾ ん 運動会 気よりの良きの 十六町会 (運動会)